

## 守護聖者と年間習俗

植 田 重 雄

### 一

人類は大自然の中に畏敬と崇拜を感じ取ってきた。大自然といっても太陽、月、星辰のような天体あり、海や山岳、大地、あるいは聖性を感じさせる樹木、動物、鳥、魚に及んでいる。しかし漠然とした広がりではなく、特定の存在物から聖性を受け取ることがある。たとえば山岳といってもその中の巨大な岩とかあるいは特別な形態や光沢をもつ石であり、水煙を捲き上げる滝などに山岳や大自然の靈威を感じとることもあり、数百年風雪に耐えて生きつづけている樹木を神木とか聖樹と呼んで敬うこともある。このような自然崇拜は人類にとって普遍的な宗教現象であり、その例をあげてゆけば、数えきれぬほどである。聖なる山といえば、わが国には富士山はじめ、白山や月山などがあり、ヒマラヤにカン・リンポチェやカンチェンジュンガがあり、モーセが十戒を授かったシナイ半島のエ

ベルモーセも聖山である。シオンの山はエルサレムの一丘陵にすぎないが、聖なる山として崇められている。エジプトではナイル河が聖河であり、鰐、カブトムシ、コガネムシまで聖化崇拜されている。このように大自然の中に人間が見出した聖なるものは多種多様であるが、総括的にいえば、大自然のいろいろな現象の中に聖なるものが宿っていることを象徴的であれ、普遍的法的であれ、人間は感じとり、表現しつづけてきた。大自然にたいする畏敬感の中から厳肅感、崇高美、荘嚴美が生れるようになっていった。

聖なるものが樹木や石に宿るといった自然崇拜から、やがて聖なるものは人間にも宿っているという宗教意識が展開していった。すぐれた宗教的人間を聖なる人間、聖者、聖人として敬まうようになった。このことは人間の中に宇宙の聖なるものが体現されたことを意味し、人間の人格性は最深最高のものが宿るところであり、人格崇拜の宗教となっていた。法の覚者、体現者として仏陀をうやまい、ロゴスが肉体をもち人格化された存在をキリストとしてあがめるのは、このことに由来する。そして歴史的に見てゆくとき、各時代、各地方、地域にそれぞれの教祖、宗祖、祖師、聖者といわれる宗教家が出現してつぎつぎと活躍し、宗教的理想をかかげ、それを実現しようとして人々から崇拜されるようになった。

このように人間の存在の内面には聖なるものを宿す場があるという確信は、仏教では仏性論によくあらわれており、人間のみならず山河草木、一切の衆生悉く仏性ありという確信に到達してゆく。キリスト教では聖霊がすべて人間の中に働きかけるといふ信仰を持つに至っている。ユダヤ教でも人間には神の宮（シェキナー）があり、そこに神の霊が宿ることによって人間のさまざまな欲望や能力はより高い統一した次元へ変換してゆくことになる。

キリスト教では宗教的価値を実現した聖者への気持がいつしか聖者崇拜という形態をとるようになっていった。キリスト神信仰を中心に統一的な信仰を持つてはいるものの、反面ヴァエティに富んだ多くの聖者を輩出するこ

とによって、キリスト教は歴史的に豊富な宗教文化を創み出すことになる。仏教でも仏を中心にして菩薩、明王部あり、諸神、諸天等々が仏国土を莊嚴し、さまざまの機に應じて迷う衆生を済度しようとするが、これが仏教文化を形成する上に多彩な彩取りを添えていった。本稿はヨーロッパにキリスト教が定着したのちに一般に崇拜されるようになった聖者、とくに守護聖者の性格や特徴、及び自ら実地に農山村を調査した民俗学的視点より見た年間習俗を考察するが、一年間の講義でなお不十分とする内容を補強するためのもので、まとまった論攷としては他日を期して綜合する予定である。

## 二 聖クリストフォロス

聖クリストフォロス像は教会とか城の外壁に画かれていることが多く、それも小さな壁画ではなく、意図的に成可く目立つように壁面に巨像で画いている。この聖者は棕櫚を杖とし、背に幼児イエスを背負い河を渡ってゆく巨人の姿で表わされている。この聖者はヨーロッパにおいてひじょうに民衆に親しまれて来た聖者であり、壁画だけでなく、彫刻や護符などにも沢山の造型を残しており、聖クリストフ教会の名のつけられた教会も多い。一体クリストフォロスとはどういう意味であるか。古い伝承によれば「レプロブス」(Reprobus)「呪われたもの」あるいは「オフェルス」(Offetus)と呼ばれていたという。これは「背負う者」といい、幼児キリストを背負う者という意味である。この聖者の画像にはつぎのような言葉が書かれている。

いかなる日もクリストフォロスの姿を見つめよ、あなたは悪しき死に会うことはないであろう。<sup>(1)</sup>

聖クリストフォロスを見る人は、かならず突然の不慮の災いにおち入ることはない。<sup>(2)</sup>

この唱え詞は何を意味するか。この聖者の画像を見るだけでも、その日は悪いこと、災いに会うことなく、悪い死にも出会わないという信仰があり、そのために教会、橋、城、人目につきやすいところに聖者像がつくられている。古代から中世にかけては彼の画像を一瞥し、一瞬に思い浮べることによって救いがあるという考え方が底流にあった。一念、正念の義である。かくして聖書が読まれる前に広く一般に図像、画像は民衆の間に広まっていたのである。

教会史資料によれば、四五〇年ニコメディアのカルケドンの司教エウラリア司教はクリストフォロス教会を建てるにあたりその潔めの祭を行ったという記録が碑文に記録されている。六世紀の終りにガラテアのテオドルス・コテス(Theodorus Suctes)の伝記の中で聖クリストフォロスを女子修道院の守護聖者として勧請したと伝えている。五九八年にはタオルミナ教区の修道院がこの聖者を守護聖者として迎えている。十二世紀にはいるとローマの暦にはこの聖者の祭が記載されるようになった。聖クリストフォロスの崇拜が図像的にも一定の形態をとるようになったのは、やはり十二世紀頃から十三世紀にかけてである。ヨーロッパに定着する聖者の特徴は幼児イエスを肩に背負い河を渡る姿となる。それ以前のクリストフォロス像は少々異っていたようである。この問題についてはあとで触れることにして、ほぼ定着したこの聖者像のあらましについてまづ述べてゆくことにする。

聖クトストフォロスはカナン(パレスチナ)に生れた並はづれた腕力と体力を持っている巨人であった。旧約聖書の中ではサムソンは巨人で拔群の強い力の巨人英雄で彼の先蹤である。中世になればギリシアの巨人英雄ヘラクレスの伝説も伝わっていたと考えられる。クリストフォロスは自己に力があることに誇りを感じ、この世界におい

てはただ力だけを信じ、力を持っているものに憧れた。まずはじめに現世の栄華と権力を持つことのできる大王に仕える。しかし大王が悪魔に屈服するのを見て、大王よりも悪魔こそこの世界を支配する力があると思うようになり、大王のもとを去って各地を放浪し、荒野に棲んでいた悪魔の群に身を投じ、魔王に仕える。だがあるとき十字架の立っているところを見ると、悪魔たちは顔色をかえて遠くへ逃げてゆくを見て、クリストフォロスは悪魔よりも強い存在があることを知った。彼は荒野の苦行者のもとにゆき、どのようにしたらクリストに出会い、仕えることができるかをたずねる。するとあなたには力があるから、河のほとりにゆき、人々を向う岸に渡す奉仕を行いなさい、そのうちにならずやクリストに出会い主と仰ぐ日が来るであろうと苦行者が告げる。この位の仕事であるならば、力のある自分でもたやすくやれるだろうといって河岸に小屋を建て、河を越えるのに難渋している旅人があると、これを背負って渡すのを務めとした。

ところがある夜のこと小屋を叩く者がある。クリストフォロスが外に出てみると、小さな子供が一人立っていて対岸まで渡してほしいという。いとまたやすいことであると、子供を肩に乗せ、大きな棕櫚を杖にして河にはいる。すると水嵩は次第に増し、肩の子供は鉛のように重くなった。何度もおれそうになるのを、やっとの思いで支えながら、向う岸にたどりつき、子供を肩からおろすと、「わたしは今までに多くの人々を背負って渡して来たが、こんなに重く感じたことははじめてだ。全世界を背負ったにしても、この子供よりは重くない」といった。するとその子供は「クリストフォロスよ、おまえは全世界どころではない。世界を創造した者を背負ったのだ。おまえが仕えようと思っている真の主クリストはわたしである」といい、証しとして彼が手にしていた棕櫚の杖は、翌朝までに花を咲かせ実を結ぶであらうと告げた。翌日そのとおりになったのを見て、クリストであることを知った。「クリストフォロス」とはまさに「クリストを背負う者」である。クリストに出会った後は、純粋に信仰に生

きる聖者となり、伝道につとめ、多くの帰依者を得るが、最後にサモス島で捕えられ、首をはねられて殉教を遂げたと伝える。彼は死の直前、「わたしを見つめ、神に信頼を置く者は、火、嵐、洪水、地震、飢餓の災いから救われよ」という誓いをたてた。このため、この聖者を思い浮べると、さまざまの危険、死の不安が消滅するという民間信仰が広まり、さきにあげたような唱え詞が生れたようである。聖クリストフォロスの祭日は七月二十五日である。この日は旅人、巡礼者の守護聖者として尊崇されている聖ヤコブの日である。聖クリストフォロスも地方によっては旅人、荷物運搬人、巡礼者として崇められているので同じ日に祝われるようになったらしい。この聖者の研究家の一人ローゼンフェルトによれば、現在のクリストフォロスの形態の初期の図像とおぼしきものは、イタリアのミラノ地方ではないかと推定している。<sup>(3)</sup>

法皇が居住し、聖ペテロ、聖パウロ、その他カトリックの大本山ともいえるべきローマへの巡礼の道は、陸路であれば、アルプスを越えなければならなかった。北イタリアからスイスの峠を越え、ドイツ、オーストリア、フランスへ出てゆく交通路は、巡礼とともに生活の必需品や文化的なものを運ぶ重要なルートであり、多くの人夫、案内人、商人が往来しなければならなかった。同時にそれは危険で不安に満ちた道であった。スイスの山村の教会や御堂にはいると、奉納画 (Votiv Tafel) が多く、山の生活や旅の安全を祈ったものが大部分を占めている。雪崩、落石、倒木、土砂崩れ、橋や道路の破損、害獣、盗賊の難、その他思いがけぬ事故が発生する率が多い。人間、家畜の病気なども含まれる。スイスの人々はアルプスの山の間を縫って東西南北へ荷物を運ぶのが、主要な生活の糧としていた時代が長かった。山岳や湖水が観光となり、国際政治の会議の場となるのはずっと後の時代である。チロル地方には聖クリストフォロスが幼児キリストを肩に乗せて歩いている図像が多い。おそらくスイス山中の峠越えの荷役人夫たちは、聖クリストフォロスを心に念じ、唱え詞を口ずさみながら険しい山道を往復したことであろう。

## 三 聖者のヨーロッパ化

聖クリストフォロス崇拜がスイス、ドイツ、フランス、オーストリア方面に伝搬されるにつれて、次第に巨人的野人的性格を帯びるようになっていった。ゲルマン固有の神ドナール (Donar) は雷神であり、農耕神として崇拜されていたが、赤い髪をしていた巨人として表象されており、戦いでたおれた英雄や神々を背負って運ぶ神であるともいわれている。この点クリストフォロスと共通した性格である。しかし視点をかえれば、アルプスの山中にはいつて来るにつれて、この聖者像はギリシア正教の表象と意味を変様させて神の子を背負う者、運んでゆく者、クリストを担って生きる者という形態をとり、ドナールに一層近付いていった性格を持つに至ったようである。イタリア系アルプスのモント・ベゴ (Mont Bego 二八七二メートル) の岩壁には牛の頭部を彫ったものが沢山見られる。牛の角は電光を象徴し、その吼え声は雷鳴を表わしていた。モント・ベゴの山地は気象的にも南北の気流が衝突し、現在でも雷の発生の多いところである。ドナールの表象はさまざまであるが、山岳に住む人々にとって聖クリストフォロスが危険を逃れる救難聖者となっていることにも注目する必要がある。彼は人間の悪しき死だけではなく、雷や雹をも守ると信ぜられた。つぎの唱え詞はスイスの山を旅する者にとって、山の危険に直面する実感から生れたものである。

聖クリストフォロスの姿を旅の途上で見つめる人は、突然の死に会うことなく、無事にゆくことができる。<sup>(4)</sup>

スイス、ドイツにはヴィルデマン (Wildemann) と呼ぶ人々が山や森に棲んでいるという伝説がある。山男、

山の精、野性人とも呼ぶべきか。このヴィルデマンは髪を長くのばし、髻を生やし、右手に棍棒、石棒あるいは樹の枝を持ち、手指、足指の爪はカギ爪のようになっており、樹の葉、樹皮、あるいは動物の毛皮を身にまとい生活している自然人である。農耕を営み、都市づくりをはじめていた平野の文明の人々にとって山岳や森林で生活する人々を奇異に感じていたかもしれないし、古い生活を棄てず、隔離した生活を営む山岳森林部族が残っていたかもしれない。他方スイスの人々は現在では自分たちは山のヴィルデマンの子孫であると自負しているようである。元来はヴィルデマンは山霊として巨人として表象されていた混合的存在の大自然のデーモンであり、文明化されて神経質になった市民社会の煩わしい規律やしきたりに一切拘束されず、自由に自然人として振舞い、しかも巨大な力を発揮できる存在である。ヴィルデマンは山や森を支配統治し、人間はそこにみだりに踏み入ることはできない。もし踏み入るときには特別のタブーを守らなければならなかった。狩猟者はさまざまなタブーをヴィルデマンに誓い、守ることによって鹿や熊、羚羊などをとることができる。

やがて文化がすすみ、都市化が行われ、文明が爛熟すると、山や森などの野性的な生活へ帰る憧れが強くなる。中世伝説には森や山の中に隠れている城や騎士の物語もその一端を表わしており、ロビンフッドや聖杯伝説は有名である。むろんキリスト教においても苦行者が山や森、人里離れた荒野で苦行し、瞑想と祈りを全うしようとする営みが有り、そのあとに聖者を記念して教会や御堂、修道院が建てられることが多い。聖クリストフォロスも元来は苦行者に近い存在であった。スイスに限らず、アルプスやバイエルンの山地には春になるとヴィルデマンが村の近くまでやって来るとか、アルプスにのぼって牛羊を飼う牧畜の人々にとっては、この山霊への慎しみや物忌みは厳しく守られねばならなかった。

山岳に棲むアルプスの人々が自分たちの持っているヴィルデマンという巨人の表象で聖クリストフォロスを想像



し、考えるということはきわめて自然な受容のプロセスであると思われる。このことは教会に画かれている図像の上からも論証できる。幼児イエスを肩に乗せ、右手に棍棒（又は樹の杖）を持ち、蓬髪裸足、毛皮をまとい、荒縄で腰をしばっている巨大な山男として画いているものが目につく。この聖者は司教冠をかぶり、長衣をまとい、錫杖を持ついかめしい権威にみちた司教の姿ではなく、力強く素朴な山で働く山男の姿であることが一層親しみを感じさせたのであろう。聖母マリアが幼児イエスを胸や膝に抱いているのに対し、聖クリストフォロスが肩に幼児を乗せて川を渡る姿が、広くヨーロッパで好まれ、しばしば祭壇画や彫刻に造型されている。ウォラギネの「黄金伝説」(Legenda Aurea)以降この聖者はヨーロッパ人の生き方の象徴、典型となっていたのである。

### 聖ミカエル

聖ミカエルは図像学<sup>イコノグラフィ</sup>においては甲冑で身を固め、劔あるいは槍を持った中世騎士の姿で表わされている。旧約聖書の中でもっとも黙示文学の形をとっているダニエル書の中で天使長ミカエルが来てダニエル（ユダヤの民）を助けるべく「人のかたちをした者」となって彼の敵対者と戦うべきことが告げられる。いわゆるマツカベアの戦争の危機に際してハスモネア王家のために立ち上る大いなる天使ミカエルは、黙示的にはユダヤ人たちの英雄として登場する。のちには悪魔の軍勢と闘う神の軍勢の首長と見做されるようになるが、こうした天使が黙示文学の中で次第にその観念と形態が増幅形成されてゆく。やがて中世騎士の守護天使となり、騎士加入式(Ritterweihe)や甲冑潔めの場合にミカエルが現われ、その騎士を守るといい伝える。しかし東方教会では大きな翼を持ち司祭の衣服を身にまとい、長い槍や劔で悪竜を刺し殺している図像が多い。悪竜はいうまでもなく神に敵対する天上のサタン(悪魔)を象徴する。ミカエルは楽園の管理者、善悪を審く天使として表わされる。天上の敵と闘う指揮者は地上

における惡との闘いにも加勢し、善なる者に味方する守護天使となつてゆく。

ミカエルは惡との闘いの大天使であるだけでなく、死者を樂園にとまなう役目をする。中世の絵画彫刻に天秤をもつ天使が造型されているのは、ミカエルである。中世の伝承によれば、死者は第一夜は聖ゲルトリュートのもとに宿り、次の夜聖ミカエルのもとに宿つてそこでパラダイスへ赴くか地獄へ墮ちるかが決まるといふ。いわば死者の審判者でもある。ユダの書簡によれば、モーセが死んだとき、天使ミカエルと惡魔とが争つたといわれている。これは本来人間の魂の内面の闘いを表わしているものであらうが、ミカエルは歴史の過程の中で死者の祭に近付いてゆき、死者の棺を安置する墓地にある御堂が建てられるようになる。ミカエルはドイツ、スイスではこのように死者の守護天使として崇められている。同時に劔や槍を持つて武將的性格は、かつてのゲルマンの劔や嵐の神ウォーダン雷神ドナールの神殿址とか、古代ローマの軍神マルスや古代ギリシアのゼウスを祀っていた神殿址の教会や御堂にミカエルを祀っていることが多いのは、古代宗教の戦いや統治の権能を持つ神々に代る存在としてミカエルが祀られたのである。聖ヨハネス ダマスケヌス (Johannes Damascenus) は「東方教会の信仰の論述」(Darlegung der Orthodoxen Glaubens) で<sup>(4)</sup>ぎのよう述べている。「天使は光である。最初の始まりなき光を点す存在である。自然や位階の上位にあるために天使たちは相互に照らし合っている。より高いものがより低いものと光と知識を頒け合っている。天使たちは神の意志の成就のために強く且つ広がっている。天使の本質の迅速さのゆえに、神の意志が命するところへ直ちにどこにでもはいってゆく。天使たちは大地の一部を守護し、創造者によつて天使たちに委託されているように諸民族、諸国家を司どる。天使たちはわれらへ人間にたいしさまざまな氣遣いをし助ける。神の意志と命令によつてわれらの上にあり、われらのそばにある」<sup>(4)</sup>。ダマスケヌスのこの言葉によればミカエルは神の光の形を証しするだけでなく、人間にたいする使者として派遣わされ、人間を守る存在であるとも規定

している。このような神学的な天使の思索から天使の表象は明確な形をとり、図像も決ってくる。

現在暦の上では九月二十九日がミカエルの日と呼んでこの守護天使を祭る日となっている。ローマにおけるミカエルの名を付けた最初の教会はヴィア サラリア (Via Salaria) に在り、九月三日に祭がおこなわれていたようであるが、中部ヨーロッパにはいつてからは九月二十九日となった。この季節は農耕牧畜の生活の上では、収穫が終り、新しい麦蒔きが始まるときであり、放牧していた家畜を畜舎に戻す頃である。したがってミカエルの日の頃は収穫感謝祭を行うところもあり、丁度ドイツの聖マルチン祭と同じように、英国の農村ではこの祭の日に行事すると一年中お金に恵まれるといい、焼鷲鳥を食べて祝う。北ドイツ各地ではミカエルの日の夕方、放牧していた牧草地から家畜を追いつ立てて、翌年の春になるまで家畜小屋に入れ、家畜の無病息災を祈る。ブランドンブルクでは草刈り鎌、小刀 (Seise) を飼料の中に入れて次の年までしまっておく習俗がある。

「ミッヘルに雷が鳴ったら、鎌をたくさん使つて刈れ」、「ミヒヤエルの日までは片手で、しかしミヒヤエルの日が過ぎたら、両手で種子を蒔け」という農事の諺がある。九月終りの雷は夏の終りを告げるものであり、忙いで麦を刈らねばならぬ。ミッヘルは天使ミカエル (ミヒヤエル) にたいし親しみをこめた農民の呼名である。この祭の頃はつぎの冬蒔きの時である。小麦はこの頃の満月となるまでの一五日間までに蒔くと翌年によく育つといわれている。事実九月、十月は麦が青く芽を出して雪が白く埋めるまで田園風景は新鮮な光景を呈する。果樹園、畑、牧草地に施す肥料もこの日を境にして行うようにしている村も多い。その他この天使の日をもって林檎の最後の摘み取りとしている地方もあり、スイスでは麦刈りを終え、最後に積んだ荷車を「ミッヘル」 (Michel) とも呼んでいる。スイスではミカエルの日の夕方、子供にパンや菓子などの施しをするところがあり、聖マルチン祭の夜と同じように子供が門付けをおこなう。モーゼル地方では焚火をしたり、ファスナットの火の輪ころがしと同じように、

車輪に藁を巻き、これに火をつけて畑や牧草地にころがして翌年の豊凶を占うところがある。春の受胎告知のガブリエル天使の日（三月二十五日）と対照的に聖ミカエルは秋の生活への転換の日として祝われたらしい、秋の到来とともに冬型の生活の始まりを告知する。その象徴的行為は新しい蠟燭を点して祭壇に供え、夜の仕事を始めることから明かである。「ミツヘルが光をともし、ヨセフがそれを消す」という諺もよくその節目を示している。聖ヨセフ（三月十九日）は冬の蠟燭を消して、春の農耕をはじめめる節目である。

今まで述べて来たことでは推察できるように、悪魔と闘ってこれを制圧する聖ミカエルは来るべき冬の自然の猛威に備えて人間の世界を守る大天使として秋の日に祭を行うようになったらしい。同時に古代ゲルマンの習俗では収穫祭とともに先祖の霊を祀り、死者の霊をとむらうのをこの季節に行った。死者を悪魔から守って天国の（楽園）に導くこの守護天使は自然にこの季節に祭るようになったようである。

### 聖ヨセフ

マリヤの許婚者であり、幼児イエスの養父となったヨセフは新約聖書の中でもあまり触れられていない。家の系譜からいえば、ダビデ王家の血すじをひいていたと書かれているが、ヨセフ自身は単純素朴な大工職人であった。ダビデ王家はヘブライ人によって理想化された家系であり、ダビデ王やソロモン王も英雄的存在として理想化され、ローマ統治下にあえぐヘブライの民にとって待望されていた。ヨセフの家が貧しい生活をしていたかどうかその詮索は別として、イエスの一族の中にヤコブ書簡をのこしているほどの者があるので、一概に貧しいといひ切れない。読み書きの堪能な人がいたことを示している。建築にたずさわっていた意味で可成りの同業者や関連職種の人々を糾合できる力を持っていたのではないかと思われる。われわれが今日見るヨセフ像は、たとえば建築建具その

他の手仕事にたずさわる労働者の守護聖者であり、手に鋸、定規などの道具を持物としている。他方少年のイエスの手をとって一しよに歩く父親としても画かれている。オーストリアの皇帝フランツ、ヨーゼフはキリストの母のマリア崇拜は盛んであるが、父ヨセフが祀られていないのは、片手落ちではないかといひ、尤もなことでもあるので、それ以後盛んにヨセフ崇拜も行われるようになり、聖母子像が安置される片側には対照的に聖ヨセフが百合の花を片手にもち少年を連れている像が並んでいる。ゾンメラッハの聖ゲオルク教会の中には、幼児イエスの手をとって聖母マリアと聖ヨセフが両側に立っている彫刻がある。これは両親と子供の睦じい姿の理想像として要求され、造型されたものである。

九世紀頃から典礼の上でも民間信仰の上でもヨセフ崇拜がおこなわれようになったが、聖ベルナル、アヴィラの聖テレジア等々フランチェスコ派からの要求が強く、一六二一年には教会ではヨセフの祭を行うようになり、三月一九日が彼の祝日となった。ローマ暦と比較すると、手仕事の女神ミネルヴァ(Minerva)の祭の日と一致する。あるいはキリスト教会が一致させたのかもしれない。この三月一九日の頃は春の農耕開始の目安にしているところが多く、聖ヨセフは農耕の守護聖者として崇められている。オーストリアのインスブルックではヨセフのこの祭の日を春のはじまりとして盛大に祝う習俗を今も守っている。

聖書によればマリアが聖霊によって妊ごもり婚約を止めようとするが、天使より神の子、世の救い主の誕生を告知されて、キリストの養父となり、マリアを庇護する決意をする。その後ヨセフは天使の命ずるままにベツレヘムへとマリアをつれてゆき、そこでイエスの誕生を見る。しかしいくばくもなくしてヘロデの迫害を逃れるべく、マリアとイエスを伴ってエジプトに旅をする。驢馬に母子を乗せて手綱をとってゆくヨセフの姿はよく宗教画の画題となる。その後のヨセフについての叙述がないのは、ヨセフはその頃可成りの高齢でイエスが成人する直前に死

んだらしい。このためかヨセフは年とった男子として画かれており、マリアとの婚約も五十歳、否六十を過ぎていたといい、ある説では九十歳であったともいわれる。一体八十歳、九十歳の老人が十六、七歳の娘と婚約しなければならぬ理由は考えられない。察するにこのような説がいわれるのは、イエスが老齡のヨセフの子供ではあり得ないことを強調するためか、あるいは族長アブラハムとサラが高齡であるにもかかわらず子供を授かる奇蹟に準ずる説話形態をとったのではないかと考えられる。

ヨセフは救世主と聖母の二人に看取られながら死んだので、この世界でもっとも幸福な最後を遂げた存在として、安らかな臨終を願う人々のための守護聖者として崇拜されている。ヨセフは生涯を独身で過す修道士などの守護聖者となり、ヨセフに「天に在します父」を祈り、よき配遇者を願う若い娘の習俗もある。またヨセフは新しく建てた家、アルムにのぼってチーズ作りをする牧牛者、養蜂家などが聖ヨセフの守護があるように祈る。「ヨセフの日が晴れていれば、よい蜜のとれる年となる」という天気占いがある。福音書に記録されたヨセフ像はひじようにかすかなものであるけれども、素朴な人柄、黙々と仕事をし神への信従をつづけ、自己の務めを果す男らしさが惹きつけるようである。そのため人生上のあらゆる苦難の代願者として崇められ、一八七〇年以来全教会の守護聖者となっている。教皇ピウス二世は一九五六年聖ヨセフの祭を行うことにし、現代社会における欠けている社会的平和を完成するために、分裂、憎悪、暴力を惹き起さぬよう、キリスト教的な潔めを行うために、世界の教会の労働者が聖ヨセフのミサ行事によるキリスト教的な信仰の潔めを行うように定めている。ヨセフ的な生き方が、現在改めて人間性の価値実現の上で見直されつつあるともいえる。

## 四 聖母の泉の習俗

西ドイツバーデン州の南西部ライン河に沿ってカイザーシュトールの山地がある。ここは西ドイツにおける唯一の火山地帯で標高は高くないが熔岩があり、地熱も高く、噴泉の温度も他の鉱泉より高い。そのせいか、よい葡萄酒がとれ、良質のワインの産地として知られている。このカイザーシュトールの北東部のはしに人口四千五百程のエンディングン(Endingen)という小さな田舎町がある。かつてオーストリア領であった頃ハプスブルグ風の美しい町造りが行われ、今もその名残りをとどめている。主として葡萄園とワインを生業としていているところであるが、ここには五つも豊かな噴泉が湧き出ており、水に恵まれたところである。市役所ライト・ハウスと並んで聳えている聖マルチン教会はこの町でもっとも古く、由緒ある教会である。

この教会は聖母の巡礼教会といって、一時は各地から聖母の恵みを得るために巡礼がおこなわれた。一六一五年この教会に祀られている聖母子像が、戦乱による国土の荒廃を嘆いて涙を流すという奇蹟がおこった。これを多くの人が見た。その日がキリスト昇天の日であったので、以後この日を記念して町の人々はいまづを点して五つの泉をまわってマリアの讃歌を歌って感謝し、祝う祭がここの年間行事となった。ところで十二月二十四日キリスト降誕前夜を期してこのエンディングンでは泉を汲む行事が行われている。待降節を迎える度毎にどこもクリスマス気分は濃厚になってゆく。室内にクリスマスツリーを飾り立てたり、家の戸口や窓に樅の枝を懸けたりする。市役所前の広場には大きな樅の樹を立て沢山の豆電球を枝の尖端ごとに吊して光を点す。教会のそばにある泉(ブルンネン)には聖母マリアが立っている。その彫像のまわりにも樅の枝を飾りつけている。

この夜はもう八時頃までには大抵の商家は店を閉めてクリスマスの準備にはいる。ホテルは客をことわり、レス

トランも酒場も営業を止めてしまふ徹底ぶりである。やがて十一時頃になると、市役所の向い側の市の記念館や教会などで集っていたブラスバンドの一行が泉のもとにやって来る。聖母マリアの泉がこれからはじまるクリスマス会を祝うもつとも中心的地方となる。楽隊員はクリスマスにちなむ歌を数曲演奏し、そのあと一般によく知られた讃美歌、「いざ歌え、いざ祝え、いざ喜びの夜」、「神の御子は今宵しもベツレヘムに生まれしぬ」、「もろ人こぞりて讀えまつれ、久しく待ちにし主は来ませり」などを歌う。もうこの頃にはあちこちから老若男女がマリアの泉のまわりに集って来る。手には壺を持って一緒に歌う。ここではその珍らしい光景を見ようとする見物客もいない。ただ行事に参加してクリスマスを迎えようとする人々だけである。やがて十二時近くなると最後にグルーバーの「きよしこの夜」、星は光り、救いの御子はみ母の胸に眠り給う」を歌う。十二時を告げる教会や市役所の鐘がひびきたる。その音の止むと同時に司祭が手をあげると、待ちかねていた人々は手に手に壺を持って聖母の噴泉を汲もうと争い、カチャカチャとふれ合う音がする。汲み終えた人々はハイリクボーク（聖なる水よ）ノ ゴッテスグナーデ（神の恵みよ）ノ と声高く叫んで壺を上になし上げる。まず自分がこの新しい水を飲み、子供に飲ませる。家に持ちかえる分を別の壺に汲んだり、代るがわる家族が飲み合ったりしてクリスマスの到来を喜ぶ。

家に帰ってゆく人々も何度も「ハイリクボーク、ゴッテスグナーデ」を唱える。帰宅後は老寄りや子供とともに飲んでお祝いをし、コーヒ、紅茶、料理用のにこしておく。葡萄園や果樹園、畑に行つてこの水を注いだり、牛や羊などの家畜にも飲ませて祝福をし、翌年の豊作を祈願する。この泉の若水汲みは教会の広場の聖母の泉を含めて町の五つの地区で一斉に行われる。このエンディングンの泉は水質が良くこれを飲むと健康に良いといつて直接飲んだり、料理などに用いる。これを飲んで病気が快方に向つたことがあると住民自ら語っており、昔からの語り伝えによつていくつかの泉の奇蹟と効用を今も人々は信じている。実際に飲んでみてさわやかで美味な感じがす



る。葡萄を栽培する人々にとってこのような泉は格別に神聖なものである。このクリスマスの泉の行事はバーゼルの近郊とかヴァルト キルヘではもって唱え詞が長くなっている。

聖なる泉よ！

神の恵みよ！

災いは外に出てゆき

幸福は中へおはいりなされ

屋根の棟の外に出てゆけ！<sup>(6)</sup>

この場合はクリスマスの特別の祝福のある泉を汲みながら、この水の力によって災いや不幸を追いつ出し、幸福を招き入れる唱え詞であり、十二月下旬ベルヒテスガーデン附近で行われるベルヒタの追いつしと内容的に類似しており、日本と比較すればいうまでもなく二月四日の節分の鬼払いと共通なものを見出す。五月のキリスト昇天祭（移動祝日）の前の晩、「涙の聖母」の奇蹟にあやかっつてエンディングの人々は松明を点して行列をつくり、この五つの泉をめぐるつて行進し、聖母マリアに感謝の歌を歌う。これを「泉の歌」とエンディングでは呼んでいる。

泉の水よ、井戸の水よ

川の水よ、海の水よ

今わたしたちはあなた方の助けを

願う

神の栄光が御母マリアの

讃歌となってひびく、

このエンディングンの町で

マリアが流し給うた涙が

わたしたちを救ってくれ

讃美の歌が水となって流れでる<sup>(7)</sup>

ゆたかに湧き出る五つの良き泉はこの町の人々にとってマリアへの感謝の讃歌となって夜空を松明の火で照らし出すのである。だが民間習俗的には丁度このキリスト昇天祭の頃、葡萄の花が咲き、結実するときであり、同時に病虫害を防ぐため、悪疫が生じないための泉への祈願でもある。ところでエンディングンでは二月中旬頃「ファスナット」(冬の追い出し夏迎えの祭、謝肉祭)の開始のときは、市役所の広場の泉で行事が行われる。この季節はもっとも寒さの厳しいときであるだけに、一日も早く冬を終らせ春を迎えようとファスナット主催の中心メンバーが泉のところでさまざまな対話をする。春(夏)の到来を告げるヨックリ(Jokkri)はもうどこかに来ているはずだ、いつも泉の中からやって来るはずだが、といったやり取りがおこなわれる。ヨックリがどこに居るかあちらこちらと探し廻る。ファスナットの主催者が泉をのぞき込むと突然ヨックリが舞台の上に躍り上る。赤と黄の三角模様の道化服を着、手に指揮棒を持つヨックリは皆に歓呼して迎えられ、喜びのメロディーをブラスバンドが演奏す

る。皆は手を拍ってヨックリと一しよにファスナットの歌を歌い、ヨックリと同じ服装をし、同じヨックリの仮面をつけた人々が大声で騒ぎながら、行列をつくって泉のそばに立ててある五月樹 (Majbaum) のまわりで歌ったり、踊りはじめる。沢山の花火が打ち上げられ、広場に明るく照明がともる。小雪がちらつく酷寒の二月の夜、人々は春を待ち望むファスナットの祭の開始に熱狂する。

ヨックリはイタリアの謝肉祭で登場する道化役的存在である。ところがこのエンディングンではヨックリは春をもたらす喜びの使者の役割を演ずる。この町のファスナットの統一した衣装は大人も子供も男も女もすべてこのヨックリの服装をし、町中がヨックリで埋まるという趣向である。興味深いのはヨックリが泉の中からやって来るという考え方である。凍りついた泉が融けはじめ豊かな春の水となって溢れる姿に、春の象徴を見た。この象徴を人間は行事化し擬人的表現であらわすとすれば、愉快で軽やかなヨックリの形態をとるのである。問題はヨックリはキリスト教とは直接関係はない。溯ればローマ文化の遺習であらうし、ファウヌスやサチュルナリアなどの春の祭の一習俗の名残りであらう。

泉に関する民間信仰や習俗としてつぎのようなシレジア地方にのこる民謡をここであげてみたい。ここはドイツの東方政策によって開拓されていった地域でポーランドに接し、福音派が多いところである。ここに伝わる民謡に「若き泉」がある。

シュネーゲビルゲの山の中に  
小さな泉が流れている

この泉を飲む者は

若返り、けっして老ることはない

新鮮な泉をいく度も

わたしはここで飲んだ

わたしは年とることはなく

いつまでも若いままにいる

わたしの愛する者よ、いよいよお別れです

いつまた逢えるのか

わたしの心のいという方よ！<sup>(8)</sup>

これは出稼ぎのためあるいは手に職をつける見習いのために村を離れてゆかなければならない若者が、すでに相思愛の若い娘と別れを惜しむ歌である。シュネーゲビルゲの山中の泉を飲むとけっして年とらぬ「若返りの泉」があるという。たとえ年月を距ても今の若さのままで村に帰り、再会するのだと若者が歌うのである。このあと若者と娘の交互対唱がつづいてゆく。今ここでは中国や日本と同じように、ヨーロッパでも若返りの泉の伝説があることを明らかにすることが主題である。

日本で新年を迎えるとき、若水汲みといって家の主人や跡とり息子が川水を桶に汲みにゆく習俗がある。この場合川の流れにさからわず、流れにそって汲まなければならぬ。溪川でなければ、井戸にいつて手桶に汲んでくる。この水で沸かした湯で茶を立て、これを福茶と呼ぶ。新年の水は他のものと同様若い生命が宿っていると信じられ

ている。

北斗七星の真下にある泉や満月に照らされている泉には若返りの力があるという伝説もある。万葉集巻一、巻三には「変若水」(おちみづ、又は「変水」)の伝説がある。

吾手本将巻跡念牟 大夫者変水泉 白髪生二有(六二七)

天橋文長雲鴨 高山文 高雲鴨月夜見乃持有越水 伊取来而公奉而越得之牟物(三二四五)

前者は単純に若返りの水を飲みなさいという歌であり、後者は月読(月の神)の持っている若返りの水を天に昇って取って来て、貴方に差上げ若返らせたいという意味の歌である。変若水は人間を若返らせる力があると信ぜられるが、とくに永遠の若い生命を持っているのが月世界にあった。月は盈虚があり、一旦欠けてゆき虚しくなるが、しかし再び生命をとり戻し、新月から満月へと変ってゆくを見て、永遠の若さを保つ源泉は月に在りと考えた。このように泉は新しい生命をもたらすものとして、東西を問わず聖化されてきたのである。

## 五

冬から春(夏)へと転換する大自然のドラマにはさまざまな行事がおこなわれる。ファスナットというのは冬の追い出し夏迎えが本来の目的である。二月から三月にかけての行事はキリスト教の精進断食の行をつづけての復活祭を迎えるファステンと集合して今日に至っている。それはクリスマスを迎えるまで約一ヶ月にわたる待降節があるのと比較できるものである。ファステン第四日曜日は昔から冬の追い出しの「レターレ」(Lätäre)と称する行

事があつた。髻を生やして痩せ衰えた老人の冬を、若々しく美しい女性の夏が追い出すという形で、藁人形をつくり、少年少女たちがさまざまな飾り布を垂らし、花や兎や小鳥をかたどった紙細工を棒のさきにつけ、町や村を行進して歌を歌う。あるいは冬と夏のどちらがこの世界を支配するかを争い、冬と夏に扮した少年、少女が広場で問答を行うこともある。結局冬が夏に負けて世界の指導権を譲って目出度く夏を迎える。冬が長く寒さの厳しい中部ヨーロッパから北部、東部のヨーロッパにかけてはとくにこのようなレターレが何度も行われる。現在では特別にレターレの行事をせずに、ファスナットの期間に行ってしまうことが多くなった。「冬は嫌やだ」、「憎しみを感ずる」、「この世界から冬がなくなったら、どんなにいいだろう」などという言葉も長い冬の試練を受けるヨーロッパの人々の偽らざる実感である。

上部ライン流域にラインフェルデンという町があり、スイスとドイツと二つの町に分れている。むろん曾つては一つの町であつたが、現在ライン河を距てて分れている。このドイツ側の町の郊外にカルサウという地区がある。町に併合されているが、純農村の生活が営まれている。ここにはこのレターレの祭の日、他とは可成りちがつた習俗がある。それは「ミースマンの村巡り」と呼ぶ行事である。この日の朝、カルサウの少年少女たちは藁で編んだもの、縦や横、はしばみの枝を携えて村のミースマンの世話役の家に集る。木の台座にこの藁のスカートや胴体を巻きつけ、縦などの緑の枝で胸や両手をつくり、ミースマンと称する大きな人形をつくり、日本風にいえばミースマンの「かしらを」挿し込む。背丈は二五〇センチほどである。ミースマンは白い肩掛けをかけ、頭には縦を編んで環飾りをつくり、とりどりの花をそえる。

ミースマン (Miesmann) はこの地方の方言で標準語に改めると、「モースマン」(Moosmann) となり、文字通りには「苔の精」の意味である。ただしこのミースマンは男性像ではなく、女性像である。眼鼻立ちはくっきりと

頬を赤く染め、左右に輪型の髪をふり分けてこの地方の農家の女性をかたどっている。豊饒多産の大地母神的な性格を示している。少年たちは櫛やはしばみの若木を切り、樹皮を削り尖端に、赤、緑、黄、白、紫の紙を束ねて結びつける。四メートル、五メートルの長さである。

この少年少女組の最年長者の少年がミースマンをかぶりかついで歩く。むろん胴体に前方が見えるような小さな窓が開けてある。このミースマンには縄がつけてあり、これを引張って家毎訪れる少年の役があり、リンリンと鉦を鳴らして来訪を告げる少女の役もある。このあとにはしばみや櫛の棒を持つ少年たちがついてゆき、家の戸口に立つと、その棒を地にたててぐるぐる廻し、ミースマンの唱え詞をのべる。

このファステン（精進）のさ中に夏が始まります

お百姓さん方、鋤をお持ちなされ

朝早くから夕方おそくまで精を出し

畑に種子を蒔きましよう

わたくしどもの最高の農夫様は

たれであるのかお知りになりたくば、

それはわれらの主イエズス・キリスト様

わたくしども人間の兄弟姉妹は

すべてキリストのしもべと

はしためにほかなりませぬ

もしこの最高の農夫様が

おられなだとすれば

皆さん方の金箱も

空しいものとなりましょう

収獲のことと申せば

テーブルの上にすぐ積み上げて下され

酸漬けのかぶら

豚の脂身

りんごにビルネ（梨）

何でもすぐにも

施しをいただきますよう

お望みとあらば

わたくしどものこのミースマンも

照覧つかまつりましょう

わたくしどものこのミースマンの

照覧なくば

皆さん方は大切な復活祭にも



御目にかかれなくなりましょう！<sup>(9)</sup>

この口上は誤りなく、よどみなくいわなければならぬ。じっときいている農家の主人や老人は間違えたり、途中につかえたりするともう一度やり直させることもある。村の青年の話によると、昔に比べこの口上はずっと短かく覚えやすくなっているという。大抵の家では一行がやってくると、家の窓を開け、入口を一杯に開いて家族が出揃ってこの唱え詞を聴き、そのあと卵、パン、バター、チーズ、菓子、果物などを差し出す。うしろに籠を持つ役の少年、少女がいて、これを受け取ると、ミースマンもびよこりとお辞儀して愛嬌をふりまく。村の人々にとってミースマンがやって来て、春になったような気持になるのであろう。

地区を一軒一軒たずねてゆく。カルサウ以外にボーッゲン、リートマットと順々に赴く頃夕方になる。なかなかの重労働で少年たちは牧草地や道端で足を投げ出してしばしば休息する。村を巡り終えると、最後にボーッゲンの丘陵にのぼってゆく。ここはライン河の曲流を見下す眺めのよいところである。ミースマンの菓の胴体やスカートを取りはずし、樅の枝の両手もはずし、樺やはしばみの棒も三きだ四きだに折りくだき、火をつけて焼いてしまい、行事を終える。ただしミースマンのかしらと台座は次の年のために残して当番の家で預ることになる。一行は集めた卵やさまざまのプレゼントを携えて帰り、村の人々のもてなす夕方の慰労会に出て食べ且つ歌い踊り、楽しい一夜を過す。

元来この行事は少年たちだけでおこなわれていたが、一九一八年以降には少女の参加も許されるようになったという。しかし実際に参加している少女は四分の一位であり、見た眼より重労働である。カルサウではミースマンの行事を無事なし遂げることによってその年の最年長の少年たちは学校を卒業し、同時に村の青年会の一員となる資

格ができるといわれている。このミースマンの村巡りの習俗についてつぎのようなことが考えられる。第一にミースマンを森や山から連れて来て夏を迎えるということは、五月、六月におこなわれる五月女王（五月花嫁）聖霊降臨祭の頃のフィングストル様にきわめて似通っている。村の若者が森や山の中にはいつてゆき、常緑樹でおおわれたフィングストルを見付け出し、これを村へ連れてくる。五月女王を見付けてこれを歓呼して迎え、白樺の若枝、摘んだ花で花環をつくり、歌を歌いながら村へ帰ってくる行事は昔から各地方で行われてきており、形はかわっても今もつづいている。ミースマンは古いゲルマンの大地の女神、あるいは農耕の女神、フライアか、ペルヒタ、ホルの女神の面影を伝えるものではないかと思われる。昔は冬の間は永雪におおわれてしまふけれど、しかしその緑の色を失うことがない。おそらく樅などの常緑樹と同じく昔は苔を材料にしてミースマンを女神像造ったかもしれない。春の目覚め、大地の豊かさには苔は大切な要素である。キリスト教の伝搬とともにゲルマンの神々の崇拜はうすれ、いつしかミースマンという曖昧な名で呼ばれるようになったのではなからうか。この女神像は明かにゲルマンの古い形体をとどめていて、キリスト教的なものとはちがっている。

第二にはミースマンの少年たちの唱え詞にあるように、農民の理想はキリストとしていふことである。キリストは農耕をしていた農民であったということではなく、救いの種子を蒔き、天の神の稔りを行うメシアとして考えているのである。「一粒の麦もし地に落ちて死なずば、ただ一つにてあらん」と聖書でのべているごとく、また最後の晩餐でわが身体であるパンを食べ、わが血である葡萄酒を飲めとキリストがのべているごとく、象徴的にも実存的にもキリストは精神と生命のパンであると考えられている。ミースマンは農村の人々にいよいよ始まる今年の農耕の告知者として訪れる。かつては春（夏）到来の告知者であった。村の古老の説明によれば、ミースマンの下半身の麦藁の部分は昨年生長し熟れた麦の茎であり、枯死し痩せ衰えた冬と死を表わし、上の若々しい女性像の赤い頬

や華やかな花冠は新たに芽生えた春（夏）を象徴するものであり、したがって古い麦藁を行事がすむと焼いてしまうのであると説明している。

年毎の農耕開始をいつ行うかは、時代により地域によってそれぞれがっている。このラインフェルデンの町のカルサウの地域では「レターレ」の頃が経験上もっとも適切であるということでもミースマンの春の告知のおふれの行事がおこなわれたものである。それにしてもこの行事はかなり特異のものである。ゲルマンの古い習俗にたいし、キリスト教が争って一方が他方を制圧したようにいう人々もいるけれども、このように和やかに共存している例もあり一律的に律し得られない。自動車が疾駆し、物事が機械的にしかも忙しく機能する現代の生活を忘れてしまいうほど、ミースマンの一行は長閑かなものである。さきにふれたような冬と夏の争い、冬と夏の問答などではなく、ミースマンは自然に冬枯れて焼かれ、新しい春の生命だけが生きのこる形態をとっている。長い冬から目覚めて春がよみがえってくるのを、人間は雪の融ける状態、野鳥の囀り、樹木の芽吹きや蕾の具合、太陽の日差しの強弱、風の吹く有様、蛙や魚の生態などから感ずる。野性の動植物の方がはるかに人間より敏感であるともいわれる。人間は春の到来、冬と夏の交代を一つの具体的なものによって象徴しようとする深い要求を持っている。人間は象徴を立て、象徴によって行事を行い、行動をともしながら、はつきりと春の訪れを確認しようとする。このように象徴は新しく生活を一新する基点となる。農耕の場合にとくにこの大自然のリズム、呼吸をよく知り、それに合致させなければならぬ。「始めに象徴ありき」という人間の切なる願望は普遍的なものとしてみとめて諸民族諸文化の中に宗教習俗として生きているのである。

## 六 ミュンナーシュタットの収穫祭における郷土演劇

バイエルン州の北部、鉱泉保養地として広く知られているバート・キッシンゲン市がある。さらに北東十キロのところに、ミュンナーシュタット (Münnerstadt) という人口六千位の鄂びた町がある。ここには中世後期の彫刻家ティルマン・リーメンシュナイダーが若くしてマイスターとなつてはじめてこの監督教会の聖マグダレーナ祭壇の大作を完成したところである。現在マグダレーナ像と四福音聖者像は、ミュンヘン国立博物館、西ベルリンダールム美術館に保存されている。教会の祭壇には今なお聖エリーザベツトその他の彫刻がのこっている。

町には中世以来の城壁や城門が残っており、城壁の下から音を立てて湧き出る泉がいくつかあり、その茂みには川瀬が棲んでいたりして、野趣に富んでいる。

この町では八月の終りから九月四日の聖母マリヤの誕生日にかけて収穫感謝祭がおこなわれる。聖母マリヤの祭と収穫祭を兼ねている。毎年独特の「ミュンナーシュタットの守護のマリヤ」(Die Schutzfrau von Münners-tadt) という野外演劇が上演され、遠近の町や村から多くの人々が観に集まつてくる。町のいたるところに聖母像が祀つてあるように、この町には聖母マリヤの守護する信仰の歴史があり、収穫祭を祝うとともに、三百数十年以前の歴史的出来事を記念してこの劇が催されている。まずこの劇が演ずる主題について簡単に触れておきたい。宗教改革に端を発してドイツ南西部に農民戦争が勃発した。その後一六一八年から四八年までは三十年間、ヨーロッパはカトリック、プロテスタントの名を籍りる政治軍事闘争がつづいた。これを「三十年戦争」といいオーストリア、ドイツ、ボヘミア、オランダ、フランス、スペイン、スイス、デンマーク、スウェーデン各国が鎗を削った。とくに中心のドイツが分裂に分裂を重ね、他国の干渉するところとなつて、国土が荒廃し、民力は疲弊し、イギリ

ス、フランスが着々と近代化、産業改革をすすめているのに比べかなりの遅れをとったといわれる。中でもスウェーデンのグスタフ・アドルフ王がドイツへ進攻し、ライン、ドナウ河まで席捲したことは、象徴的な出来事であった。このミュンナーシュタットにもスウェーデン軍（これに同調するワイマール軍）が突如包囲攻撃し、降伏させようとした。「一六四一年の二月の始め」と記録されている。しかし何故か一旦攻撃しながら中止した。その後数か月して再び包囲攻撃したが、またも中止して軍を引き上げていった。二度にわたり、攻撃をうけたのである。ミュンナーシュタットの守りが堅く、攻略は困難と見たか、別に他の原因で作戦の一大変更があったのか明かでないが、当時スウェーデン軍の強力な力の前に他の町が蹂躪されていたさ中、破壊と占領をまぬかれたことはミュンナーシュタットの人々の間に敬虔な伝説が生れた。それはこの町を聖母が守護してくれたということである。とくに切迫していた事態の中で日頃から捧げていたローゼンクランツの熱い祈りがききとどけられたのだという。それゆえここではとくに聖母マリヤ誕生の日（九月四日）に市民たちは行列行進してこの出来事に感謝をあらわし、祝うようになった。こうしたことを背景にしてルートヴィヒ・ニュートリンク（Ludwig Nidling）が一つの劇にまとめたのがこの「ミュンナーシュタットの守護マリヤ」という野外劇である。歴史的には二月始めの出来事であったものを、収穫感謝祭にふさわしく、一六四一年八月十五日マリヤ昇天の日の午後に起ったことに改めてドラマを構成している。主な登場人物は市長ハンス・ファイト、夫人アポローネ、娘オッテリア、ヨルゲン塔門の指揮者ミヤエル・シュタツプ、吟遊音楽師カスパー、ローゼンクランツ会のスザンナ、スウェーデン軍司令官オットーフォン・シャウムブルク、スウェーデン軍兵士、市民防衛隊、市民、避難民、修道院学生等々二百五十人以上が登場し、いかにも市民全体が参加している感じがする。

序幕では三人の大鼓を持つ騎士が出て、収穫祭のファンファーレを告げ、市長ファイト役の俳優が登場して華や

かな祭の最中に突如襲った戦争とその苦難にたいしこの町がいかに闘い、天の恵みをうけ自由になったか、「われらのミュンナーシュタットに起ったことをとくと舞台の上で御覧下され」と口上を述べる。

第一部の市役所とその広場は収穫祭の開始を前にしてせわしく騒がしい。副市長はじめ勞務員たちが準備のために右往左往する中に、市長の娘オッテリアに想いをよせるメルキオールという若者が花束を捧げにやってくるが、目的を果せない。滑稽な役どころである。市長その他の人物も登場して祭の行列をベランダで待ち受ける。

第二部はいよいよ収穫祭の行列が旗を持ち馬に乗った人々を先頭に行進する。市民の子供、娘たち、修道院の学生、フィードラーやギター、太鼓、笛を奏しながらやってくる。娘や子供たちは髪に花を飾り、手に花束を持っている。花で飾った鎌を持ち、麦や干し草刈りの若者、娘たちが荷車に麦束を積み、音楽に合せ、楽しく歌いながら登場する。

ハイサ ユハイサ、ハリ ハロ トララ！

恵み深い夏だ、収穫祭だ！

祝福の畑のおかげで市民も満ち足りる！

力にみてる聖母がミュンナーシュタットを守って下さるからだ、

ハイサ ユハイサ、ハリ ハロ トララ！

行列が市役所の前にとまり、市長万才の声が起り、つづいてテラスに出ている市長夫人、娘オッテリアにも歓呼の声があがる。市長ファイトは市民の一年の労苦と神の恵みを感謝し、市の繁栄を祝い挨拶する。麦刈りの女たち

がつぎのような歌を歌う。

夏は時の海の中で

ざわめき立ち

春に花咲いたものを

今刈り入れる

鎌が畑に鳴り

大鎌が囲み畑でひびく

大麦、小麦の楽しい

収穫の日がやって来た

最後の車が畑から打穀場へ向かっている

喜んで祝おう、

これらは皆神がわれらに贈って下されたものだと

だからわれらは収穫祭に

神に喜び感謝しよう

市が飢えぬように

未来もまた恵みあれと感謝しよう！<sup>(11)</sup>

.....

歌いながら女たちは輪舞をはじめ、花を撒く。麦刈りの男女は収穫の踊りをはじめめる。これは古い踊りといわれている。修道院の学生、市民も加わり、祭は熱気を帯びてくる。

第三部では祭の踊りが最高潮に達した頃、遠くで大砲の音があり、スウェーデン軍の攻撃であることが分る。場面は一転し、市北東のヨルゲン塔と呼ばれる城門で警備についていた指揮の若い将校のミヒヤエル・シュタップが駆けつけ、スウェーデン軍が市の東の丘陵カイゼルスベルクを占拠し配置についていることを報告する。市長は全市の武器をとり得る人々を集め指揮官を命じ、守備に就くよう命ずる。シュタップと相思相愛の娘オッテリヤは互いに「神が守って下さるよう！」という挨拶をかわして別れる。近隣の村から荷馬車に荷物を積んだ避難民が聖像をかかえてぞくぞくと市中にのがれてくる。スウェーデン軍のために焼き払われ、着のみのままの者が多い。平和だった村の教会で祈っている間にたちまち戦場となってしまうと嘆く老人もいる。

やがて場面が変わり、スウェーデン軍の指令官シャウムブルクが太鼓を持つ兵士とともにヨルゲン塔の指揮をしているシュタップの案内で市長のもとに会見に来る。むろんすみやかに降伏して開城することを勧告に来たのである。しかし、市長は即座に拒絶する。シュタップもミュンナーシュタットのために最後まで戦う決意であるといい、市長は彼に全軍の指揮を命ずる。「オッテリアの名誉のために、スウェーデン軍の勝利者となる」といい居合せた市民たちも「われらもこの町のために戦って死のう」と口々に叫ぶと、シャウムブルクは「ではあなた方の願い



通りにわたしの方からは花火代りに沢山の كانون 砲を御見舞し、收穫祭をたのしくさせてあげよう」と威圧しながら帰ってゆく。市長はシュタツプに娘のオッテリアと婚約してもよいと約束し、二人は喜んで別れのキスをする。やがて武装した青年たちにシュタツプは「鉾槍を高く、全員守備につけ！」と号令し、城壁の方へ向かう。市長フアイトも武装して部下を連れて前線に向かう。

残った市長夫人アポロニヤとオッテリアはしばらく思案くれてつぎのようという。「ローゼン克蘭ツのほかには何もないわたしたちは今これが武器となって男の人達が勇敢に戦えるよう勝って市の門から凱旋してくるよう祈りましょう」とオッテリアがいう。母親もうなづき、町にいる女性を集め祈るように呼びかけてくれと吟遊楽師フイドラーに頼む。フイドラーも「敵はわれらに死を舞踏をさせようとしているが、心を合せれば、ミュンナーシュタットは滅びない」といつてあっちこちで人々に向かって教会に集まるようにふれまわる。そこへローゼン克蘭ツ兄弟会の女性のリーダーのスザンナが子供たちを連れてマリア讃歌を歌いながらやって来る。彼らは市の緊急の事態を知らないで讃美の歌を歌っている。オッテリアは駆けよって身をかがめ、子供をやさしく抱き、ヨルゲン塔のある方を指さして祈る。

「幼い清らかな者よ、あの塔の上に聖母が立っていらっしゃる。あなたたちの祈る言葉があの石を貫いて天高く聖母の御心の中にはいつてゆきますように」。すると子供はつぎのように歌う。「塔の上にあつてそれを自らの家となし給う聖母よ、今不安におののく者たちがあなたのもとに逃れてきています。強い腕をのばしてお守り下さい、武器を取って戦う者たちに天のあわれみをもって守って下さい……」。オッテリアは子供の歌を賞め、「小さいダヴィデがゴリアテを打ったように、あなたたちの祈りもきくと聴きとどけられるでしょう」と子供にキスをする。花環を教会に捧げようとするスザンナやアポロニヤたちは退場し、オッテリアただ一人となる。彼女はヨルゲン塔

のマリヤ像に向かってひざまづく。

第一線の城門の守備についてその任務を全うしようとしている恋人を思い、「かつてわが子の死を見とどけた聖母よ、わたしの最後の願いをききとどけて下さい」といいながらつぎのような熱烈な祈りを捧げる。

彼が劔を受けてたおれてもわたしは嘆かない、

ただ彼と一しょにいないことだけが悲しい、

神が傷を与えるならば、彼は静かに耐えるだろう、

彼はわたくしに嘆く以外はだれにも嘆かない、

マリヤよ、彼の生命はあなたとわたしの間にあります！

勝利者としてわたしのもとへ帰るか、

死せる英雄としてあなたのみもとにあるかです！

おお、神よ、戦いが始まります、ラッパが鳴っています！

.....

スウェーデン軍はヨルゲン塔の方向に向って大砲を打って来る。オッテリアは「彼が死なねばならぬなら、砲弾をわたしにまず当てて下さい、今は持てるものを犠牲にしなければならぬ時、マリヤよ、わたしたちの市を救い給え！」と祈る。彼女は恍惚の状態で祈っている。スウェーデン軍の砲撃がつづく。

コーラスがさまざまな歌を歌って場面を進行してゆく。それはこのフランケンの地を守るマリヤへの讃歌であ

る。アポロニヤとスザンナは教会から帰ってくるとオッテリアがたおれている。かけよって救れおこす。彼女は夢から醒めたように、しばらく茫然としている。やがて親たことを語り出す。突然雷鳴よりも大きい砲弾の音が塔に落ちたが、塔はくずれなかった。雪のように白い衣をまとい空のように青い外套をまとった聖母が、子供のポールのような砲弾を受けてかばっているのが二度、三度と起ったと語る。射撃や砲声が止み、戦闘に変化が生ずる。馬丁デイトマールがかけつけて、戦況を告げる。包囲していたスウェーデン軍は、攻撃を止めて急に撤退しはじめたという。伝令のしらせによると、ヨルゲン塔に打ち込まれた砲弾は炸裂したが、聖母像は無事であったという。そしてそのとき重傷を負った者があつたという報告がはいる。やがて負傷者が担架で運ばれてくる。その中に重傷で意識を喪ったシュタツプがいる。オッテリアは駆けよる。彼女のために防衛に赴き死んだのだと嘆く。父親の市長ファイトも身命を賭して忠実に命令のまま活躍したシュタツプを惜しむ。シュタツプのために歌うマリヤ讃歌からシュタツプは意識が戻り、眼を開ける。「わたしは生きていた、わたしはどこにいたのだ、だれが塔からここへ連れてきたのだ。わたしは部署から離れまいと誓っていたのに!」、「敵はどこへ行ったか、ヨルゲン塔はだれが守っているか」と矢つぎ早に訊ねる。馬丁デイトマールが語るところでは、塔に大砲が打ち込まれたとき、マリヤ像に代ってわたしをと彼は庇って負傷したといわれる。血を流したが幸い急所ははずれていた。オッテリアはじめ一同はほっとする。各地を放浪していた吟遊音楽師カスパーは、この町と市民を守るスタツプの心意気に打たれ、ここに生きることを決意する。市長ファイトはカスパーに、「新しい英雄譚の一頁に君はどのように記録するだろうか」と訊ねた。

すると彼はつぎのような言葉を教会の壁に記録することをお許しいただきたいと読み上げる。

聖母マリヤがミュンナーシュタットの町とその兄弟を

いかに愛したかを見よ、

敵から攻撃をうけたこの町を

まる一日マリヤは守り給うた、

町の遺産を母親のように守り、

敵からのすべての危険を解消して下さった

砲撃で頻死の傷をうけた者を

すぐにききとどけ、癒して下さった。

市長は金かざり師に二つの指輪を造らせ、オッテリアとシュタツプの二人に結婚をするようにと祝福する。そこで市民の喜びの聲が高まる。

万才ミュンナーシュタットの市長！

万才フランケンの花嫁！

万才ミュンナーシュタット！

賑やかな音楽と歓声のうちに再び祭の行列は教会へと向かう。

この郷土演劇は市役所と教会ヨルゲントールシュトラーセにある古い木造建築の郷土劇場館ヘンリッヒ・ヘンリッヒ・ヘンリッヒの前のテラスを舞

台に、広場を観客席にして上演される野外劇である。興味深いのは、ここで話題になっているヨルゲン塔は教会と町並みの間に間近に聳えており、町全体がこの野外劇の背景にはいつてしまい、中世以来の遺蹟の中でそのままその時代を演ずることになる。しかも劇場の入口にも古い聖母像が祀られており、そこが上演の中心になっている。

この劇の原作者ニュートリンクはこの聖マグダレーナ教会の司祭であり、古い町並みには家毎にいつてよい程、聖母の彫像が建物に安置されている。ヨルゲン塔は一二五〇年に建てられ、その後城塔として堅固に造り改められた。ここに祀られるマリヤ像は一三八〇年の作といわれ、市民の崇敬をうけているものの一つである。南の城塔はオペレートル(Obere Tor)と呼ばれ、一三世紀末に建てられ、のちにルネサンス式切妻が加えられた。ここにも同じ一三八〇年のマリヤ像が安置されている。町全体は聖母に守られ、聖母とともに生活しているところである。したがってこの劇の真の主人公は聖母である。ただし見えざる存在、沈黙したまままで登場しているので、とくにヒロインの敬虔なオッテリアを通して語りかける形態をとっていることになる。

さらに興味深いのは、この劇に描かれる時代の衣裳をつけて収穫祭の古い歌や踊りを再現していること、登場人物がこのスウェーデン侵攻当時の市長や副市長などすべて記録にのこる実在の人物でありその名をそのまま用いているとのことである。もちろんこの劇中のように語り、行動したかは別であろう。

夕方を待ちかねてあちこちに篝火を焚き、収穫の踊り(Erneztanz)が始まる。祝いの垂れ幕が家々の窓から垂らされる。一方で、古い楽器の伴奏による古い踊りが輪をつくってはじめられ他方ではプラスチックによるモダンな踊りもさかんである。舞台で演じられた収穫祭が、そのまま現代の現実の感謝祭と一つに融け合い、最後の祭の夜を最高潮のものへ高めようとしている。若者と娘が手をとって跳躍して躍る。七度跳び(Siebensprung)をやって見せ、若者が拍手を浴びる。ゲルマンの踊りは火を中心に、あるいは樹木を真中にして輪をつくって踊るのが

基本であるといわれている。夜が更けても歌や踊り、楽しい笑い声や喚声は止みそうもない。しるじろと銀河が殊の外冴えている秋の一夜であった。

収穫を祝い、感謝する収穫祭は、教会の献堂式とをあわせて祝うキルメス (Kirmes)、キルビィ (Kirwi) の形のものもある。ここミューンナーシュタットでは年毎の収穫感謝の祭以外にスウェーデンの攻撃から町を守ってくれた聖母マリアの感謝をもあわせて行うところに、独特な郷土芸能となっていることに注目したい。古いケルト文化、ゲルマン古習俗においても収穫をもたらす女神、大地母神への感謝の祭がおこなわれていた。その一つ一つについてはすでに他の論文で詳しく論じているのでここでは省くけれど、キリスト教においても大地の稔りについては聖母マリアへの崇拜は可成り広く且つ深く根づいていた。さきに述べた「泉の習俗」でもマリアへの崇拜を基本としておこなわれており、たんなる習俗としてでなく、歴史的にも記念して聖母が庶民の生活の中に滲透していることを示す。聖母像や守護聖者像が教会はむろんのこと町や村の城門や塔、広場、家の切妻、入口その他に彫刻され、画かれて立っているのは、たんなる装飾ではなく、強い崇教の念、庶民の敬虔な信仰心に根ざしたものである。

#### 引用資料及び参考文献

- (1) Christophori Faciem die quacunque illa nempie die morte mala non monieris.
- (2) Christophori sancti speciem quicunque tuetur, illo nempie die nullo languore tenetur.
- (3) H. F. Rosenfelt; Der Heilige Christophorus, Seine Verehrung u. Seine Legende.
- (4) Christophori per viam cernit cum quisque tutus tunc ibit, subita nec morte perdit figuram.
- (5) „Die Engel sind Licht……, am ersten anfanglosen Licht entzundet…… Wegen der Überordnung des Ranges Oder der Natur erleuchten sie sich gegenseitig…… Die Höheren teilen den Nideren Licht und Erkenntnis mit. Sie sind stark und bereit zur Erfüllung des Göttlichen Willens. Dank der Schnelligkeit ihres Wesens finden sie sich allsogleich überall ein, wohin der Wille Gottes sie befiehlt. Sie beschützen die Erdtelle, sie stehen den

Völkern und Ländern vor, wie es ihnen vom Schöpfer aufgetragen ist. Sin sorgen sich um unsere Angelegenheiten und helfen uns; nach Gottes Willen und Befehl stehen sie über uns und sind beständig bei uns. Darlegung des orthodoxen Glaubens (II. 3); Joh, Damas-Cenus.

- ⑥ Hoolig Wog! Gottes Gnade! Unglück Huus! druus! Glück ins Huus! Zum Dachfirst uus!
- ⑦ Brunnen. Quellen, Flüsse, Meere,  
 Eure Hilf' ich jetzt verlang,  
 Zu der Muttergottes Ehre  
 Stimmet an ein Lobgesang.  
 Weil ihr sonst von Wasser fließt,  
 helfet mir die Zähren, Grüßen.  
 Aie Maria geweinet hat,  
 hier in der Endinger Stadt.
- ⑧ Und in den Schneegebirge, da fließt ein Brunnlein kalt, und wer das Brunnlein trinket, und wer das Brunnlein trinket wird jung und nimmer alt.  
 Ich habe daraus getrunken gar machen  
 Frischen Frunk, ich bin nicht alt geworden,  
 ich bin noch allzeit jung.  
 Ade, mein Schatz, ich scheide, ade, mein Schätzelein! 《Wann Kommst du denn doch wieder, Herzallerliebster mein?》.
- ⑨ Mitti Faschte fangt de Summer a.  
 do mueß jeder Bur ein Pflueg ha,  
 von Morgens früh bis abends spät,  
 bis der Bauer hät sin Acker gsät. —  
 Wollt ihr wissen, wer unser oberster Bauersmann ist,

Das ist unser Herr Jesus Christ!

Wir Brüder und Schwestern sind alle seine Knecht und Mägd,——

und wenn der oberste Bauersmann nicht wär,

dann stünde manchen Herrn der Kasten leer.——

Und wenn es umme e Schnieder ischt:

der hockt glie obe on die Tisch

Und frißt und suuft, sischt glich, was ischt:

Suure Ruebe, späck und Schnitz!

Und wenndr wend, so gend is au,

Und beschauet euse Miesme au,

Und bechaueter euse Miesme it,

so erlebeder de heilig Ostertag au it!

(10) Heisa juheisa, halli hallo tralla!

Der Sommer war uns gnadig, das Erntefest ist da,!

Vom Segen unsrer Auln wird jeder Bürger satt!

Die mädrigste der Frauen, beschirmt uns Münnerstadt.

Heis a juheisa, halli hallo tralla!

Der Sommer war uns gnädig, das Erntefest ist da!

(11) Schon wieder ist ein Sommer

Gerauscht ins Meer der Zeit.

Was uns im Lenz erblühle

Stand nun zum Schnitt bereit.

Die Sichel klang im Felde,

Die Sense sang im Hag,



So kam für Korn und Weizen

Der frohe Erntetag. (Der Rest weggelassen).

Die Schutzfrau von Münnerstadt. Ein fränkische Heimatspiel von Ludwig Nüdling. Volkstümliche Fest; L. Petzoldt. Das Endinger, Tränenmirakel von 1615; Rolf Wih. Brednich und Karl Kurrus Das Jahr u. Seine Feste; G. Gugitz. Das Große Buch der Heiligen; Mercher.